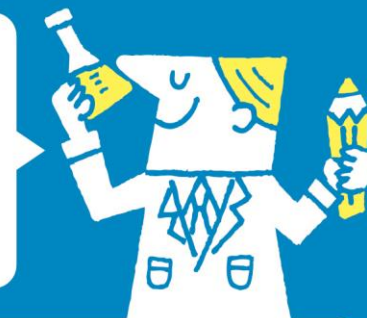


ニッセンケン分室「思いつきラボ」No. 63

熊本地震は 2 週間経ったいまでも…



とにかくすごい地震が起きてしまいました。2016年4月14日と16日に震度7の揺れを観測したのですが、震度7というのは現在の震度階級ではもっとも大きな震度ということになります。1948年(昭和23年)に震度階級を震度1～震度7という区分に決められたのですが、これまで震度7は3回しか観測されていないのです。1995年(平成7年)1月17日の阪神淡路大震災で淡路島北部が、そして2004年(平成16年)10月23日の新潟中越地震で新潟県川口町と2011年(平成23年)3月11日の東日本大震災で宮城県栗原市が記録しただけなのです。

現在の震度階級が制定されて68年間で3回しか発生していないのにわずか3日間の間に震度7を2回も記録することは考えられないことだったのです。さらに、その後の2週間の間に震度5弱以上の地震が18回(4/29現在)も起きているのです。震度7が2回、震度6強が2回、震度6弱が3回、震度5強が4回、震度5弱が7回の計18回となっています。ちなみに昨年の2015年年間で震度5強が5回と震度5弱が5回の計10回が発生しているのですが、この数字からみても今回の「熊本地震」がいかにすごい規模で発生しているのが分かります。これだけの期間で連続して強い地震が起こることも想像しにくいものだったのです。

震度階級	計測震度
0	0.5 未満
1	0.5 以上 1.5 未満
2	1.5 以上 2.5 未満
3	2.5 以上 3.5 未満
4	3.5 以上 4.5 未満
5 弱	4.5 以上 5.0 未満
5 強	5.0 以上 5.5 未満
6 弱	5.5 以上 6.0 未満
6 強	6.0 以上 6.5 未満
7	6.5 以上

報道で身体に感じる揺れの震度 1 以上が 1000 回を超えたというのもよく耳にしますが 2015 年 1 年間の震度 1 以上の地震合計は気象庁の記録で 1841 回と発表されています。この数字は日本国内での合計ですので今回の頻度の多さも想像を超えています。すべてにおいて予想できないものになっています。一般的には大きな地震があると最大マグニチュードを本震としてその後の余震は本震を超える数字はでないことが多いので 余震のマグニチュードの方が大きかったことがさらに被害を大きくしてしまいました。

余震は本震より小さいというのはやはり思い込みで油断してはいけないということを再認識させられることとなりました。群発地震と呼ばれるタイプの地震は本震と余震のマグニチュードの差が小さいものが続けて数回おきるのですが 今回の地震の 14 日のものが日奈久(ひなぐ)断層帯でマグニチュード 6.5 で 16 日が隣接する布田川(ふたがわ)断層帯でマグニチュード 7.3 を記録したので群発地震ではなく前震・本震型と報道されていました。地震のタイプはともかくとして 2 週間後の 29 日に 震度 5 強を観測していることからまだ地震はおさまってはいないと判断するしかありません。

過去の記録



大きな地震があるとその土地ゆかりの古文書に過去にも似たような地震記録が残されているという話がでてくるのですが 今回もやはり過去に同じような地震があったという記述が紹介されていました。ちょっと気になった地震があったのですが“慶長豊後地震”と呼ばれる 1596 年に起きた大地震でも豊後地域 今の大分地域中心に長い期間にわたって大きな地震が続いたという記述があるそうです。前震が 1 ヶ月ほど前から発生して本震がありその後さらに 1 ヶ月ほど大きな地震が繰り返されたと解説されていました。

ほぼ 2 ヶ月にわたって連続して大きな地震が続いたとのこと。似たような事例が確かにあったので今回の熊本地震も長期にわたることもあり得るのです。とはいえ過去にあったからといって同じ規模なのかどうかは結果からしか分かりませんが 過去の事例を参考にして避難の対応は考えられると思います。今回の熊本地震は活断層沿いに震源地が移動しており あらためて活断層の存在を意識することが大切なことが解りました。

南海トラフ地震の前兆とか阿蘇山噴火の前触れとかの憶測もありますが今回の地震があってもなくても南海トラフ地震や阿蘇山噴火がいつ起きても不思議ではないので情報に振り回されずに災害時の対応を考えておくべきなのです。熊本地方 大分地方の皆様が落ち着いた生活に早く戻れることを願っていますが とにかく想定ができないほどの大地震なのでこれからも注意が必要となります。

原稿担当：竹中 直(チヨク)

